

(4) 伯父・井上亀六 (1874～1952)

丸山が大きな影響を受けた親族として、母セイの異父兄である井上亀六 (藁村) がいる (画像：井上亀六〈後列、丸山彰氏提供〉)。丸山幹治にとっては新聞『日本』記者時代の同僚であり、『日本』の経営が変わったことを受けて退社する際も行動を共にした。



井上はその後、政教社に移って三宅雪嶺らとともに『日本及日本人』の刊行に携わる。しかし、1923(大正12)年に政教社の経営方針をめぐる三宅と井上ら他の社員との間に対立が生じ、結局三宅は退社して井上が政教社の社主となった。これ以後の政教社は国粋主義的色彩を強めていくが、経営は思わしくない状態がつづき、1929(昭和4)年に井上は政教社を退いて大日社を設立し、雑誌『大日』を創刊した。丸山に言わせれば井上は「右翼」であり、丸山幹治や長谷川如是閑らとは思想的立場を異にするが、「今の内ゲバとは非常に違って、「イデオロギーを超えて」人間としての関係は保たれていた」という。

井上は、「まるで修身教科書から抜けて来たような「人格者」として子供の眼には映っていた——また事実そうだった」。そのバックボーンを形成していたのは仏教であった。

僕らの子供の時の追体験からみても、阿部次郎の「人格主義」なんかから来た普通いう「大正デモクラシー」よりは、杉浦重剛の塾に通っていた僕の(叔父)の井上亀六なんか、教養でいえば仏典です、ただその仏典をほんとうに読んでいるし、それがまたほんとうにいわば「血肉」になっている。日常会話に自在に仏典が出てくるような、そ

ういう意味での「教養主義」がある。教養主義などといっても、リベラリズムのハイカラで偽善的なものではなく、普通の意味での「人格高潔」であって、むしろほんとうの「修養主義」です。まあ、大正リベラリズムの方が、その点あやしいやね。(藤田省三『異端論断章』)

このような「人格者」井上の像は、丸山が後年になって社会の「しつけ」や「型」、あるいは「教養」を論じるときに一つのモデルを提供したのであろう。